
教養教育科目における必修外国語「日本語」科目の検討－習熟度別クラス編成の効果－

研究代表者 木下 謙朗（経済学部）

共同研究者 三原 龍志（文学部）

1. はじめに

日本政府の「第5回教育未来創造会議」（内閣官房2023）において、2033年までに外国人留学生40万人の受け入れを目標とする方針が示されたが、2025年6月末現在、すでに43万人余が在留資格「留学」で日本に滞在している（出入国在留管理庁2025）。近年、在留外国人数は増加し、2026年末時点で400万人を超えたが、少子高齢化による生産年齢人口の減少に伴い、育成就労制度が2027年4月から開始されることなどから、今後も在留外国人数は増加の一途をたどると予想される。2024年時点における、日本国内の外国人留学生の在学割合は約5%である一方、本学では留学生hh入津が約3.8%にとどまっている。本学のグローバル化戦略「RYUKOKU GLOBAL VISION 2023」では、受け入れ留学生数を700名とする数値目標を掲げており、留学生数の拡充とともに、より高度な日本語教育支援の両立が求められている。

2025年に向けた教養教育改革の一環として、昨年度まで学部正規留学生（以下、学部留学生）を対象とする「日本語」科目の習熟度別クラス編成の適正化および測定手法の検討を行ってきた。その結果、後述するが、3クラス編成が妥当であること、測定手法として「SPOT」（Simple Performance-Oriented Test）と口頭運用能力を測定するインタビューテスト（以下「JF ロールプレイテスト」）が有効であることが明らかとなった。

本研究では、実際に入学した学部留学生の口頭運用能力と言語知識を把握し、習熟度別編成の効果と妥当性を検討する。具体的には、言語知識を測定する「SPOT」と、口頭運用能力を測定する「JF ロールプレイテスト」を実施し、プレテストとポストテストの結果について比較分析を行った。

2. 本プロジェクトの成果

①正規学部留学生の口頭運用能力と言語知識の把握

2025年度に本学に入学した学部留学生のうち、2025年度から開始した新カリキュラムの対象者となる文学部、経済学部、法学部、政策学部、心理学部nに入学した学部留学生は49名で

あった（経営学部と社会学部は旧カリキュラムで実施）。本プロジェクトでは、上記の 49 名に対して「SPOT」と「JF ロールプレイテスト」を実施し、プレテストとポストテストの結果についての比較分析を通じて、習熟度別クラス編成の効果と妥当性を検討した。

・プレテスト

2025 年 3 月に、入学予定者 45 名（4 名欠席）に「JF ロールプレイテスト」を実施した。その結果、CEFR A2 レベル 12 名（24.5%）、B1 レベル 20 名（40.8%）、B2 レベル 13 名（26.5%）という結果となり、口頭運用能力において B1 レベルを中心に分布していることが明らかとなった。

日本語知識の「SPOT」は「SPOT90」・「Grammar90」・「漢字 SPOT50」の 3 テストで言語知識を測定した。受験者 37 名について項目ごとに見ると、「SPOT90」は初級 4 名（10.8%）、中級 31 名（83.8%）、上級 2 名（5.4%）、「Grammar90」は初級 7 名（18.9%）、中級 29 名（78.4%）、上級 1 名（2.7%）、「漢字 SPOT50」は初級 1 名（2.7%）、中級 5 名（13.5%）、上級 31 名（83.8%）という結果になった。このことから、漢字語彙の知識が高い漢字圏出身の学部留学生が多い中、いずれのテストにおいても初級レベルの学部留学生が存在していることが判明した。

上記の結果に加え、出願時に提出が義務付けられている日本留学試験の結果を総合的に判断し、3 レベルに分類した。各レベルを「パターン」（履修できる語学パターンの意味）とし、パターン①（CEFR で A2 レベル相当）15 名、パターン②（CEFR で B1 レベル相当）31 名、パターン③（CEFR で B2 レベル以上相当）3 名とした。各パターンで履修できる日本語、英語および初修外国語科目や単位数、履修年次については、[サイト](#)を参照のこと。

・ポストテスト

口頭運用能力と言語知識の変化を測定するため、2026 年 2 月にプレテストと同様に、「JF ロールプレイテスト」と「SPOT」を実施した。プレテストを受けた学部留学生 45 名のうち、ポストテストを受けた 21 名の結果は以下のとおりである。

口頭運用能力は、対象者全員が B1 レベルという結果になった。つまり、口頭運用能力の「基礎段階の言語使用者」とされる A2 レベルが 0 名となった一方で、「自立した言語使用者」から「熟達した言語使用者」への移行期である B2 レベルも 0 名であった。

言語知識について見ると、「SPOT90」は中級 18 名 (85.7%)、上級 3 名 (14.3%)、「Grammar90」は初級 1 名 (4.8%)、中級 20 名 (95.2%)、「漢字 SPOT50」は中級 1 名 (4.8%)、上級 20 名 (95.2%) という結果になった。「Grammar90」のみ初級レベルと判定された学部留学生在が 1 名いたが、その他は中級以上で、「漢字 SPOT50」においては 95.0%以上の学部留学生在が上級と判定される結果となった。

・パターン別にみた口頭運用能力と言語知識の変化

ポストテストにおいて「JF ロールプレイテスト」と「SPOT」を受けた学部留学生在は 21 名であった。パターン別にみると、パターン① 5 名、パターン② 15 名、パターン③ 1 名であったため、ここではパターン③を除き、パターン①とパターン②の結果について述べる。

「JF ロールプレイテスト」については、パターン①とパターン②ともに全員が B1 レベルの結果であった。パターン①の 5 名においては、A2 レベルから B1 レベルへ向上した一方で、パターン②の 15 名の中で B2 レベルへ向上した学部留学生在は見られなかった。

言語知識について見ると、「Grammar90」はパターン①とパターン②共に全員が中級であった。また、パターン①の 5 名は「SPOT90」においても中級レベル、「漢字 SPOT50」は全員が上級という結果になった。パターン②の 15 名の「SPOT90」は、中級 13 名 (85.7%)、上級 2 名 (9.5%)、「漢字 SPOT50」は中級 1 名 (4.8%)、上級 14 名 (90.5%) であった。中級であった 1 名以外は漢字圏の学部留学生在であることを踏まえると、納得できる結果である。以下に、「SPOT90」「Grammar90」「漢字 SPOT50」のパターン別平均点と両パターンの差をまとめた表である。

表 1 パターン別プレテストとポストテストの平均値

	パターン	SPOT90	Grammar90	漢字 50
プレテスト	①	65.8	56.9	44.1
	②	69.1	60.5	44.1
	①と②の差	3.3	3.6	0.0
ポストテスト	①	67.0	55.6	43.4
	②	71.1	59.9	43.8
	①と②の差	4.1	4.3	0.4

プレテストとポストテストの受験者や人数が異なるため、二つのテスト結果を単純に比較することはできないが、入学時から 1 年後の学部留学生の口頭運用能力と言語知識についての傾向としては以下の点にまとめることができる。

- ・口頭運用能力については、パターン①の学部留学生に向上が見られた一方で、パターン②の学部留学生は現状維持、もしくは低下が見られた。
- ・言語知識については、文法と漢字については低下傾向が確認された一方で、パターン①とパターン②の差が広がるといった結果が示された。

②成果報告

- ・日本語プロフィシエンシー研究学会での口頭発表

日時：2025 年 8 月 8 日（金）・9 日（土）

場所：京都外国語大学 R452

2024 年度「教養教育・学部共通コース FD 研究開発プロジェクト」「教養教育科目における必修外国語「日本語」科目の改善に向けて」で得られた結果を分析し直し、「大学プレイスメントテストにおける口頭能力測定の試み：JOPT と JF ロールプレイテストの測定結果から見える課題と可能性」というタイトルで、2025 年 8 月 8 日に開催された日本語プロフィシエンシー研究学会 2025 年度研究大会で口頭発表を行った。発表では、JOPT(Japanese Oral Proficiency Test)と JF ロールプレイテストの二つの試験の評価結果と測定観点を比較し、相関関係と測定特性について指摘した。

- ・水谷信子記念日本語教育研究論集への投稿

上記、日本語プロフィシエンシー研究学会で得られたコメントを踏まえ、2024 年度「教養教育・学部共通コース FD 研究開発プロジェクト」「教養教育科目における必修外国語「日本語」科目の改善に向けて」で得られた結果をさらに詳細に分析し直し、「学部留学生を対象としたプレイスメントテストにおける口頭能力測定の試み」としてまとめたものを『水谷信子記念日本語教育論集』第 7・8 号へ投稿した。JOPT と JF ロールプレイテストの二つの試験が測定対象とする能力に違いがある可能性を示し、実用性と信頼性を踏まえたプレイスメントテストの実施を提案している。なお、2026 年 2 月 5 日に論文採択の通知を受けている。

・学習者の深い思考を促すコンテンツベースの授業デザインセミナー開催

日時：2026 年 2 月 28 日（土）13 時～16 時

場所：龍谷大学 深草学舎 灯炬館 203 教室

講師：小山悟氏（九州大学留学生センター）

プログラム：

1. 深い思考を促す日本語授業
2. ジグソー法体験 I
3. 深い思考を促す授業デザイン I
4. ジグソー法体験 II（30 分）
5. 深い思考を促す授業デザイン II
6. まとめ+質疑応答

日本語学習者の口頭運用能力向上に向けて、文字・語彙や表現（文法）といった形式にとどまらず、大学生としての深い思考を促すような日本語の授業デザインについての講演とワークショップを実施した。

最初に「日本語の授業になぜ深い思考が必要なのか」「コンテンツベースとトピックベースの違いは何か」「最初の実践：質問実践」「知識構成型ジグソー法とは何か」などの説明の後、「日本の国民食」をテーマとしたジグソー法を体験した。さらに、もう一つのジグソー法を体験することで、深い思考に導く授業デザインについて参加者が「自分事」として考えるセミナーとなった。

3. おわりに

本研究では、2025 年度より開始した学部留学生の習熟度別クラス編成の効果と妥当性を検討するために、「SPOT」と「JF ロールプレイテスト」を実施し、プレテストとポストテストの結果について比較分析を行った。

全体的な傾向ではあるが、パターン①のレベルでは口頭運用能力の向上が見られたが、パターン②の学生はパターン①の学生のような向上は見られなかった。このような結果となったと考えられる要因として、いくつか挙げられる。

・調査対象者

2025 年度に入学した学部留学生は 49 名であったが、プレテストとしての「SPOT」の受験

者は 37 名、「JF ロールプレイテスト」受験者は 45 名、ポストテストとしての「SPOT」の受験者は 42 名、「JF ロールプレイテスト」受験者は 27 名であった。このことから、限られたデータ（調査対象者）での傾向しか見ることができなかった。

・インタビュー

プレテストとしての「JF ロールプレイテスト」については、2 名の日本語教育専門家に依頼して実施した。一方で、ポストテストとしてのインタビューは、プレテストで担当した 2 名のうち 1 名に依頼した。CEFR の基準を参照しながらレベル判定をしてもらったが、複数名で実施することで判定のばらつきが生じてしまう可能性は否めない。

2025 年度入学の学部留学生を対象とした新カリキュラムでは、3 つのレベル分けを行うことで、言語学習としては望ましいクラスサイズとなった。旧カリキュラムのクラスサイズの約半数となったことから、学習者一人ひとりへの対応が可能になっただけでなく、発話機会の増加や心理的安全性の向上が見られ、学習者間の関係性の深化にもつながった。

今後もこの利点を生かすためには、より精緻なクラス分けを実施する必要がある。そのためには、調査対象者の拡大と口頭運用能力測定の精緻化が求められる。さらに、特にパターン②レベルの伸び悩みは、今後のカリキュラム設計上の重要な課題である。